

湯川と日本におけるフライフィッシングの父

湯川は奥日光地域の中心を縫うように流れています。湯滝の下から始まり、戦場ヶ原を蛇行しながら流れ、源流から約 12.4km のところで中禅寺湖に流れこみます。この川は、1868 年に始まった明治維新において重要な役割を果たした有名なスコットランド人商人、トーマス・ブレイク・グラバー（1838-1911）の尽力により、日本におけるフライフィッシングの発祥地として最もよく知られています。グラバーは、避暑地としての日光に魅了された外国人の一人で、1893 年に中禅寺湖の湖岸にロッジを建てました。彼はフライフィッシングの愛好家でもあり、湯川はおそらく彼にスコットランドの自宅近くの溪流を想起させたのでしょう。

当時、日光の川や湖には長年、魚が棲んでいませんでした。高くそびえる華厳ノ滝が回遊の障害となり、また、中禅寺湖は神聖な場所とされていたため、魚の放流は禁止されていました。1902 年、グラバーはコロラド州からブルックトラウト（カワマス）の卵約 2 万 5000 個を取り寄せて湯川に孵化した稚魚を放流する許可を得ました。最初に放流された稚魚は台風で死んでしまいましたが、二度目に放流された稚魚は定着し、この川は日光に夏の別荘を建てた外国の要人やビジネスマンたちのお気に入りのフライ・フィッシング・スポットになりました。その後、湯川は湯ノ湖とともに皇室の所有物として管理されました。現在、湯川全域にわたって適用されたキャッチ・アンド・リリース制のおかげで、湯川は国内有数のブルックトラウト（カワマス）とレインボートラウト（ニジマス）のフライフィッシングスポ

ットであり続けています。